



A promotional image featuring two female characters from the game. On the left, a girl with short purple hair and a red dress holds a long staff-like weapon. On the right, a girl with long brown hair and a white dress holds a sword. They are set against a yellow background with glowing particles.

SWORD ART ONLINE
LISBETH EDITION

ソードアート・オンライン リズベット・エディション
ponz.info × Word Gear

『これは、ゲームであっても遊びではない』

—茅場晶彦



03

LISBETH EDITION

03 - 『忙しい人のための30秒でわかるSAO』 ぽん酢

05 - 『水音、槌音』 九里史生

13 - 『非日常という日常』 ぽん酢

水音、槌音

みずおと、つちおと

インクラッド第48層 2024年8月



九里史生

「強化たのむ」

カウンターに白鞘のロングソードを置きながら平然とそう言う依頼人の顔を、あたしは一秒ほどまじまじと眺めてしまった。

「…………な、何だよ？」

相手が少し上体を引いたところで、ようやく我に返つて咳払いをひとつ。

「べ、別に。……ただ、いつまでこの剣を引っ張るつもりなんだろって思つただけ」

照れ隠しに軽くからかつたつもりの台詞だったが、「い、いいだろ引つ張つたつて。コイツ気に入ってるんだから」

と、いう返事にまたしても言葉に詰まってしまう。このまま顔を付き合わせていると、ほんのちよこつとだけ頬つぶたが赤くなっているのがバレてしまいそうなので、あたしはぷいっと顔を逸らせて言つた。

「ま、装備更新するもしないもアンタの勝手ですけどね。んじや、工房まで来てちょうだい」

両手をカウンターに伸ばし、「よいしょ」と氣合を入れてロングソードを持ち上げる。

顔が赤くなる理由は、まったく単純。

いま腕の中にある細身の長剣《ダークリバルサー》は、

三ヶ月前にあたし——鍛冶屋リズベットがスミスハン

マーを振るつて鍛えたプレイヤー・メイド武器で、そしてついさつきこの剣を「気に入つて」る」とコメントした黒髪黒服の片手剣使いキリトに、あたしは恋しているからだ。出会つたその日から、ずっと。

＊＊＊

AINクラッド第48層主街区リンクダースの南地区に、あたしの店《リズベット武具店》はある。生産職用プレイヤーショップとしては平均的な、一階に売り場と工房、二階にキッチンと寝室の四部屋構成。

間取りに対してもやや高価だったのは、水路に接する裏手に大型の水車を備えているからだ。壁を貫いて工房内に伸びる動力軸には、様々な大型装置を接続できる。バーン屋なら粉ひき機、裁縫屋なら機織機、そして鍛冶屋にはふいごや回転砥石。本来ならプレイヤーの手で押したり回したりせねばならない道具を自動化してくれるメリットを思えば、昼夜問わざことん、ごとんと響く回転音もむしろ心地良い。

キリトが店に現われたのは、AINクラッドで二度目の夏の昼下がりだった。勤勉なプレイヤーは狩場や迷宮区にこもり、そうでもないプレイヤーは酒場やレストランで食後の氷入りドリンクを啜つて、他の客はない。

あたしは店番をNPCのハンナ（女の子、推定十五歳、

姓はハイネマン)に任せ、重い剣を抱えて工房へと移動した。勝手知ったる様子でついてきたキリトがドアを閉めると、水車の回転音がひときわ大きくなる。

「……インクラッドの夏があんまり暑くなくてよかつたよな、ホント」

部屋の隅で赤々と燃える炉を見ての感想だろう、背後からそんな声が聞こえた。あたしは鉄床の隣の椅子に腰掛けながら、思わず苦笑してしまう。

「暑さを気にするなら、圈内にいるときくらいそれ脱げばいいのに」

『黒の剣士』なるカツコイイ二つ名を持つキリトのトレードマークは膝下まで伸びる黒革のロングコートで、もし現実世界の八月にこんな格好をしていたらあつとう間に熱中症だろう。鞘に入れたままのダークリバルサーをひとまず鉄床^{アシビル}に置き、壁に寄りかかるキリトに視線を向けると、あちらも頭を搔きながら苦笑いしている。「なんかもう、寝てる時以外はコレ着てないと落ち着かないんだよな……」

「つて言つても、まさか一層から同じのを装備し続けるわけじゃないんでしょ?」

以前に、親友のアスナとまさにこの場所で駄弁つている時、キリトの一張羅が話題に出たことがある。彼女によれば、なんと第一層のフロアボスから『コート・オブ・ミッドナイト』なるユニーク・レアを手に入れて以来ずつと同じ格好なのだそうだ。

あたしの問いに、キリトはもう一度笑うとかぶりを振つた。

「さすがに防具はちよいちよい更新してるよ。この『ラックウイルム・コート』でええと、四代目かな」

「へえ……。それはモンスターードロップ?」

「うんにや、ブレイヤーメイド……」

と答えたキリトの顔にややビミョーな表情がちらりとよぎつたのを、あたしは見逃さない。笑顔を保つたまま、すかさず追及する。

「へー。どこのお店の?」

「いや、その……あ、『アシュレイズ』ですけど……」

「へえー。ほおー。ふうう——ん」

語尾を思いつきり伸ばしてやると、キリトは実に解りやすく視線を泳がせる。

アシュレイは、インクラッドでナンバーワンの呼び名も高いカリスマ裁縫師だ。鍛冶屋のあたしとはべつに商売敵というわけでもないのだが、あちらも同じリンダースの北区に店舗を構え、広さはウチの三倍(水車は二基)、しかも店名が『Ashley·s』と来れば、一方的に意識せざるを得ない。そのうえご当人は、年の頃二十代前半のなかなかの美人なのである。

我が家リズベット武具店の防具ラインナップにも片手剣士用の軽装鎧があることを知っているからだろう、キリトは冷や汗エフェクトが発生する寸前といつた表情で言葉を連ねた。

「いやその、俺のビルトは革防具前提だし、黒ドラゴンの革なんて高級素材扱えるティラーはアシュレイさんくらいしか知らない。それでやむなく、だな……」

「べつに何も言つてないっしょー。でも、アシュレイさんって確か、オーダーメイドは気に入つた注文しか受けないんじやなかつたっけー？」

「そ、そうなの？ 俺はほら、お得意さんのアスナに紹介して貰つたから……そういうえばリズの店に最初に来た時もそうだつたな。あんときは参つたよなー、売り物の剣を試し振りしたらへシ折っちゃつてさ……」

そこまで言つたところで、しまつた地雷踏んだ、という表情で硬直するので、あたしは耐えきれずに噴き出してしまふ。

「あははは……そんな顔しなくてもいいわよ、あれもいい経験だつたからさ。当時は、アキュラ^{アキラ}シーやクイック^{クイック}ネスを優先した剣ばつか作つて、デュラ^{デュラ}ビリティをおざなりにしてたのよね。システムアシスト強めの剣はウケがいいけど、いざつて時にお客様の命を守つてくれるのは丈夫な剣なんだつてことを、気付かせてくれたからね……」

笑いを收め、鉄床に向き直ると、もう一度ダークリバルサーを持ち上げる。あたしのS.T.R^{エス・ティ・アール}じや、運ぶことはできても戦闘ではまともに振れない重さの剣を、ゆっくりと鞘から抜いていく。

ワンハンド・ロングソードとしては少し細めの刀身は、

わずかに青みがかつた銀色。アスナの愛剣『ランベントライト』がクリスタルっぽい透明感を帯びたシルバーなのに對して、こちらはファンタジー作品によく出てくる『ミスリル銀』という表現がしつくりくる。

「これ、確かにま+39よね？」

「うん。つまり今日は+40、チャレンジつてことだな」

あたしの問いをキリトはあつさり肯定するが、強化値+40という数字はちょっと尋常ではない。

アインクラッドに存在するあらゆる武器防具は、『強化試行回数』というプロバティを備えている。文字通り、強化をチャレンジできる回数で、成功しても失敗しても数字は1ずつ減っていく。

ダークリバルサーの試行回数は、あたしの鍛えた剣のなかではぶつちぎりに多い50。そして、残り回数は8。つまり現在までの強化成績は、成功39回に対し失敗はわずか3回だ。成功率にすると、ええと……約93パーセント。これはもう奇跡と言つてもいい数字で、情報屋が嗅ぎつけば速攻でコツを取材しに来るだろう。もつとも、來たところであたしにも理由なんか解らないのだが。

ともあれ、三ヶ月も前に鍛えた剣を、キリトが今も最前線で（現在は七十層）使つていられるのは、この恐るべき強化値があつてこそ。武器強化に熱心でないプレイヤーはほとんど一層ごとにメインアームを更新するといふのに、キリトがあたし作の剣をこんなに長く装備してくれているのは、嬉しい反面いぶかしくもある。

なぜなら、強化の成功率を最大値までブーストしようと思つたら、必要な素材アイテムの質と量がとんでもないことになるからだ。いくら彼がソロプレイヤーで、ドロップアイテムを全部自分のものにできるからと想つて、素材集めに大変な時間がかかるることは想像に難くない。

——そろそろこの剣は諦めて、最前線でドロップしたリア武器に更新すれば？

鍛冶屋としては、あたしはそう助言するべきなのだろう。

たぶん、70層クラスのリア武器なら、+20くらいにすれば総合プロパティはこのダークリバルサー+39と並ぶはずだ。そして要求される強化素材は、今よりかなり少なく済む。

あたしは剣を見つめたまま、すうっと息を吸い、口を開く。

しかし、出てきた言葉は——

「……強化素材、きつちり揃つてんでしょう？ +40チャレンジなんて、確率フルブーストじゃなきゃあたしやりたくないわよ」

内心を押し殺して、唇を尖らせながらそう言うと、キリトはやりと笑つて頷いた。

「当然」

指貫きのグローブ（もちろん黒レザー製）を嵌めた右手が、素早くウインドウを操作する。オブジェクト化さ

れたのは、やたらと大きな革袋だ。剣を置き、受け取った袋の中を覗くと、いかにも高級そうな金属板の他に、モンスターの牙やら角やら各種宝石やらがぎっしり詰まっている。

それらを床に広げて数を確認するのは大変な手間なので、あたしは袋を指でタップして、内容物を表示する小窓を浮き上がらせる。次にアンビル上の剣をタップし、小窓に表示される強化値をもう一度叩くと、次の強化に必要な素材アイテムを教えるサブ窓が浮く。

袋のほうの窓を指先でドラッグし、剣の窓に接触させると自動で比較モードになり、双方の内容が同じかどうかを教えてくれる。アイテム名と個数が全部青くなれば完全一致。

「オッケーね。しつかしまあ、よく毎度毎度こんだけ集めてくるわねえ！」

またしても内心と異なる台詞を口にすると、キリトはひょいと肩をすくめた。

「ほとんどのアイテムは最前線でもドロップするから、マッピングしてれば自然に溜まるよ。下の層に集めに行かなきやならないのはごく一部さ」

その『ごく一部』を必要数集めるのがどんなに大変か、時としてメイス片手に同じことをしているあたしにはよく解る。でも、口から出るのはやっぱり裏腹な言葉。

『攻略組が下の層で無双してると情報屋にちくられちゃうわよ。《オレサマ野郎行きつけの店》なんて新聞に載

るの、お断りだからね！」

「ははは、下での狩りは深夜限定にしてるから大丈夫だよ」

「……ふーん。それなら、いいけど」

昼間は最前線で危険な迷宮区のマッピングをして、ほんの少し仮眠を取つたら、今度はしんどい素材集め。キリトはこの三ヶ月、ずっとそんな生活を続けているということだ。思わず横目で顔色を確かめてしまうが、アバターの肌は女の子のように滑らかで、溜まっているだろう疲労を表に出すことはない。

ひそやかな葛藤を噛み締めたまま、あたしは右手の一振りで全部のウインドウを消去する。

「そんじや、早速やるわよ。お望みのプロパティは？」
「シャーブネスでよろしく！」

どこまでも陽性な依頼人に軽く領き返し、部屋の主といつた趣の大型加熱炉に手を伸ばすと、メニューを《作成》から《強化》にチエンジ。内容をシャーブネスに設定してから、革袋に詰まつた強化素材をざざーっと流し込む。

ほんとうなら、炉が真っ赤に熱せられるまでふいごを動かす必要があるけれど、水車のおかげでその手順は自動化されている。露店用の小型携行炉は燃料を使うのでふいごは要らないものの、こんなに大量の素材を受け入れる容量はない。

百を超える数のオブジェクトを軽々呑み込んだ大型炉

は、どことなく嬉しそうに火力を増すと、素材群をほんの数秒で溶解させた。オレンジがかつた赤だつた炎の色が、シャーブネス強化モードを示す銀色に変化する。

すかさず、鞘から抜いたままのダークリバルサーを炉の中へ。銀色の光が刀身を包み込み、眩く輝きはじめたところで、剣を鉄床に移動させる。

あとは、スミスハンマーで規定数叩くだけだ。

この剣をインゴットから鍛え上げた時は、実に二百五十回近くもハンマーを振らなきやならなかつたけれど、強化ならば+1チャレンジだろうと+40だろうと叩く數はたつた十回に固定されている。

あたしは腰のベルトから愛用の《ゾリンゲン・ハンマー+22》を外すと、赤い革を巻かれたグリップをしっかり握った。

スミスハンマーは道具アイテムであると同時に打撃属性武器でもあるので、もちろん強化できる。と言つても自分で自分を叩くわけにはいかないので、あたしはコレの強化専用のサブハンマーを持っている。

キリトの根気には及ばないけれど、二ヶ月かけて強化してきた愛剣ならぬ愛トンカチを、呼吸に合わせて振り上げる。頂点で少しタメを入れて、一気に振り下ろす。
「あん！」と澄んだ鎧音。あたしの大好きな音だ。銀とオレンジ色が入り交じつた火花が飛び散り、タイル張りの床に跳ねて消える。

二回。三回。売り物を造る時や、他のお客様の武器

を強化する時は、最初の一回で無心になれる——というより音と光に夢中になつてしまふのに、キリトの剣を叩く時だけはどうしても気持ちが入つてしまふ。

あの人を守つてね、また一緒にこの工房に戻つてきてね、と語りかけながらハンマーを振る。

四回、五回。この剣がキリトの背中にある限り、彼とあたしは唯一無二の紳で繋がっている。アスナのように、ボス攻略戦で彼の背中を守つたりはできないけれど、剣の耐久力を回復させ、強化値を上げることで、彼を助けることはできる。

六回、七回。

……でも。

この紳は、永遠じゃない。ダークリバルサーの強化試行回数は、今日でまたひとつ減つて、残り7。いまのベースで強化を続けていけば、あと二ヶ月……冬が来る前に使い切つてしまう。そうなつたら、最前線で戦い続けるために、どうしたつて新しい剣に切り替えなきやならない。

その時キリトが、もう一度あたしに剣の作成を依頼してくれるとは限らない。ううん、その可能性は低い。ハイスペックの剣を鍛えるにはものすごく稀少な……つまりとても高価なインゴットが必要になるけれど、モンスターードロップなら一コルもかかるないのだ。常に最前線で戦い続け、全てのボス攻略戦に参加し、そのうえかなりの高確率でラストアタックボーナスを取つているキリ

トなら、レアな片手剣を手に入れる機会には事欠かないはずだ。

八回。そして九回目の鎧音を響かせたあたしの右手が空中で、止まつた。

途惑つたようなキリトの視線を左頬に感じる。でもそつちを見ることはできない。

ハンマーを、振り下ろす代わりにそつと胸に抱き締める。アンビルの上では、銀色の輝きに包まれたダークリバルサーが静かに最後の一打ちを待つている。強化工フェクトの待機時間は三分。それを過ぎたら刀身を包む輝きが消滅して、強化は自動的に失敗判定される。

「…………あたし…………」

口から零れたのは、いつも元気な鍛冶屋リズベットに似つかわしくない震え声だった。

「…………あたし、もう打てない…………。だって…………だって、試行回数を使い切つたら、この剣の役目は…………そこで…………」

終わってしまう。

本当は——本当にキリトのためを思うなら、むしろ早くその日が来たほうがいいのだ。新しい剣に更新すれば、また強化は+1からになって、素材集めがずっと楽になるのだから。頭ではそう解っているのに、でもあたしの腕は動かない。ハンマーを胸に抱え込んだまま、小さく震えるだけ。

と、キリトが壁から離れる気配がした。こつ、こつと

静かな足音がすぐ隣で止まる。黒いコートの裾をふわりと広げ、剣士はあたしの隣に膝をつく。

「……あのさ、リズ。俺……予感があるんだ」

依頼人として、早く叩けよ！ と怒つていい場面なのに、キリトの声は穏やかだった。出会った日の夜、ドランゴンの巣穴の底で色々な話を聞かせてくれた時と、何も変わっていない。

「……予感？」

おずおずと視線を向けたあたしのすぐ目の前で、黒い瞳がはにかむように一度瞬いた。

「うん。最前線はまだ七十層で、その上に三十も残つてるんだけどさ……でも、何でかな。俺がこの城のラスボスと戦う時、握つてるのはこのダークリバ尔斯ーだつていう予感、いや確信がある」

「……どうして、そんなことが解るの……？」

「だつてさ、この剣の銘を決めたのはカーディナル・システムだろ？ Dark Repulser、闇を斥けるもの……そんな名前、『最終装備』以外につけちゃダメだろ」

——などと言つて、ニヤリと悪戯っぽく笑う顔を、あたしはしばし無言で見つめる。

いつもなら、深く長いため息をつくか、「何テキトーなこと言つてるのよ」とつっこむ場面だ。でも今だけは、あたしの唇にも素直な笑みが滲んだ。小さな、でももう震えの取れた声で答える。

「……そうかもね。ううん……きっと、そうだよね……」

「そうさ。……だからほら、最後の一回、力キーンと決めちゃおうぜ」

「うん。あたしも予感がする。今回も、きっと成功」胸に抱いていたハンマーを、もう一度ゆっくりと振り上げる。

大きく息を吸い、止め、瞼を閉じて、剣に囁き掛ける。

——不安がらせてごめんね。あなたと、あなたのご主人様は、ずっとあたしの周りから闇を遠ざけてくれてたんだものね。あたしも信じるよ……いつか、あなたの光が、この城に囚われてる人みんなを照らす時がくるって。優しく、そして力強く、ハンマーを振り下ろす。

十回。

あたしが差し出した『ダークリバ尔斯ー+40』の柄を、黒革グローブに包まれた右手がしっかりと握つた。

ひゅひゅん、とまるで重さを感じさせないスピードで刃が閃き、空中に七色の輝きを散らす。最後に軽やかに音を立てて刀身を鞘に滑り込ませ、持ち主は満足そうに笑う。

「うん、これで70層ボスもどんと来いだ」
「そんなこと言つて、69層みたく油断してボスの目の前

で転倒しないでよね。新聞の一面にその記事載つてて、あたしまで恥ずかしかったんだからね」

「は、はい……すんません……」

腕組みをする鍛冶屋リズベットの前で、頭をぱりぱり搔く剣士キリト。すっかりいつもの二人に戻つて、ほつとするような、ちょっとだけ寂しいような。

そんな気持ちを押し殺し、大きく伸びをする。

「ううーん……はあー、まあ何にせよ成功してよかつたわ。いくら確率フルブーストでも、失敗する時はするからね。こんな緊張する強化は、もうしばらくゴメンだわ」

何の気なしに言つた台詞だつたが、それを聞いたキリトの顔に、なぜか気まずそうな表情が浮かぶ。

「…………どうしたの？」

「い、いやその……実は、何と言いますか、今日はちょうどタイミングが重なつて……」

「…………何のタイミング？」

すると剣士は、ストレージ・ウインドウを開いてダークリバルサーを格納した。続けて素早く操作すると、ウインドウ上にオブジェクト化されたのは、黒革の鞘に包まれた、こちらも強烈な存在感を放つ長剣。

「…………こいつの+40チャレンジも、お願ひできたらなーつて……」

そんな言葉とともに差し出された、キリトのもう一振りの愛剣『エリュシデータ』を、あたしは数秒間言葉も

なく眺めた。
はあ——つ。と、深く長一いため息。

(終わり)

一万人がゲーム内に
意識を捕らわれ
約二年が経過していた

ゲーム内で死は
実際の死という
異常な環境で
人々はそれぞれの
日常を送つていた

アインクラッド
四十八層

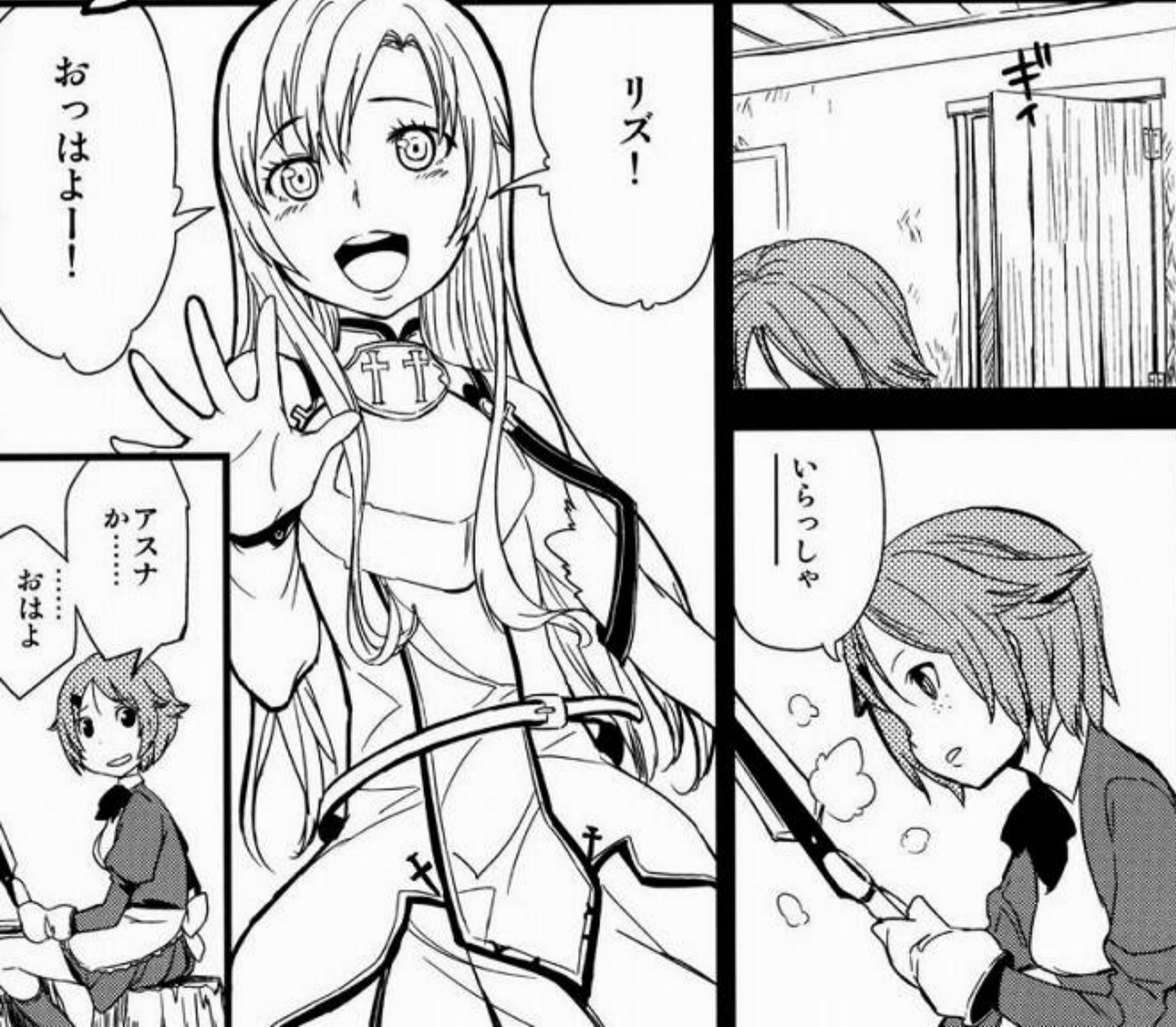
リングダース

リズベット
鍛冶店

カーン

カーン

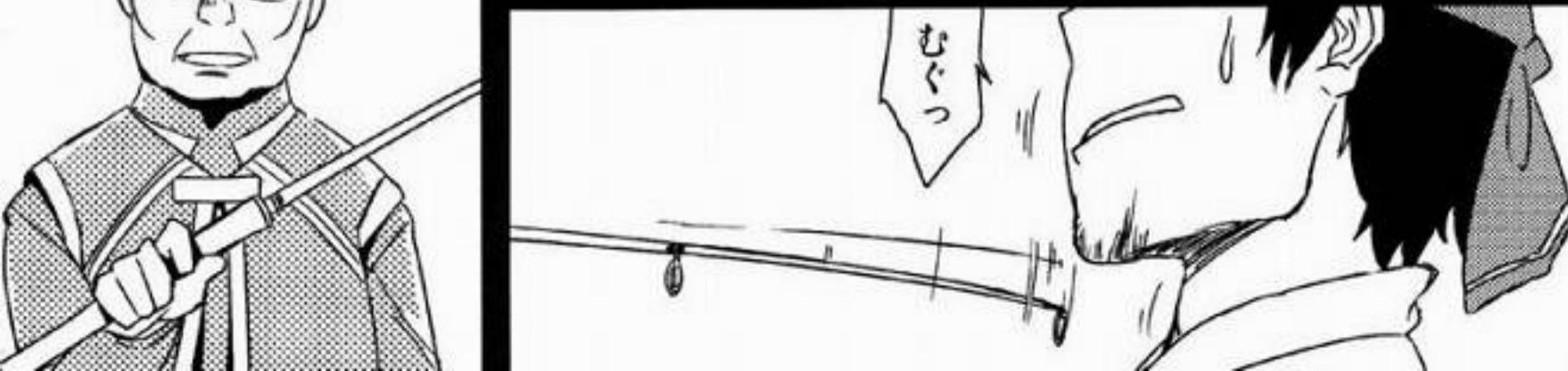
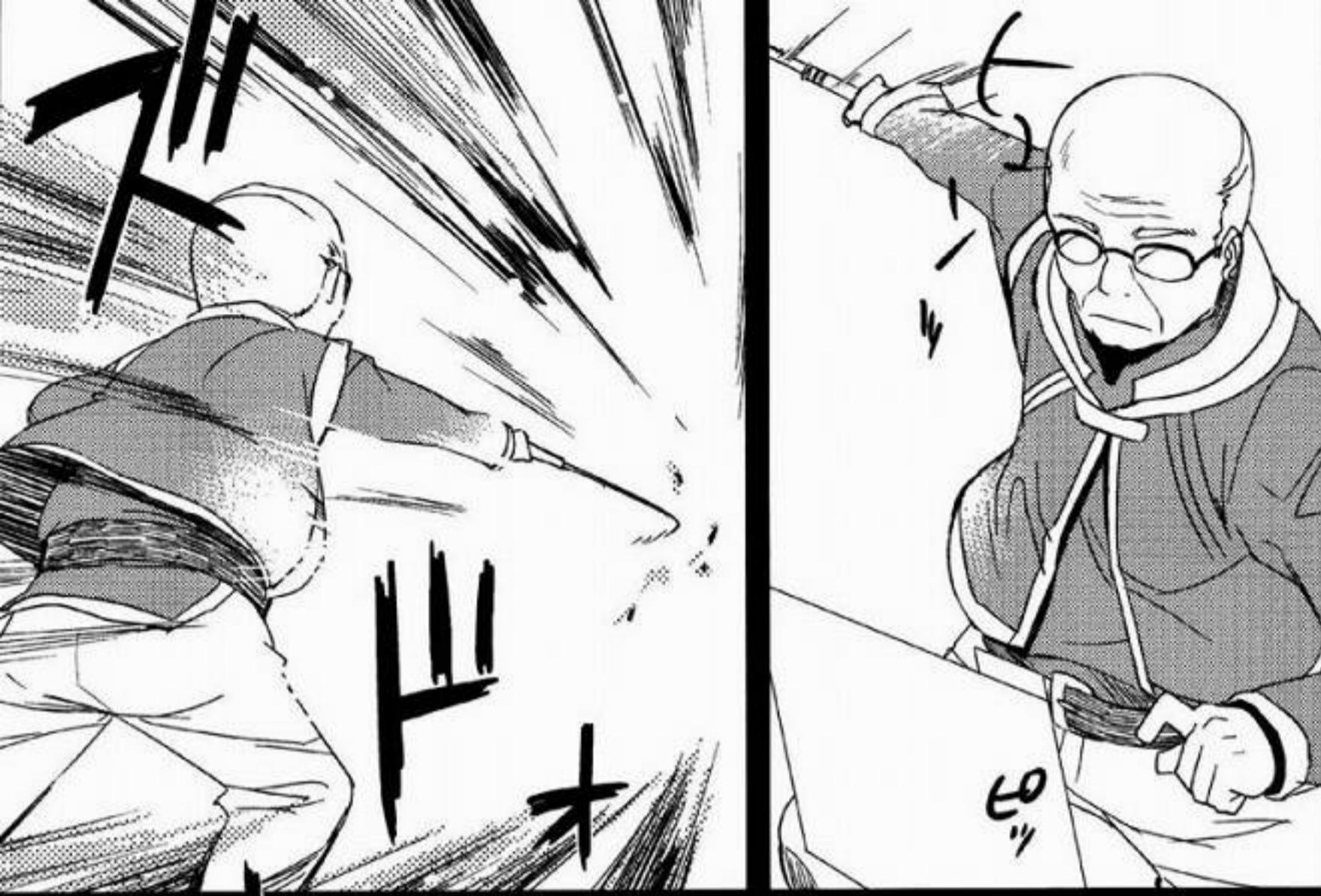
カーン



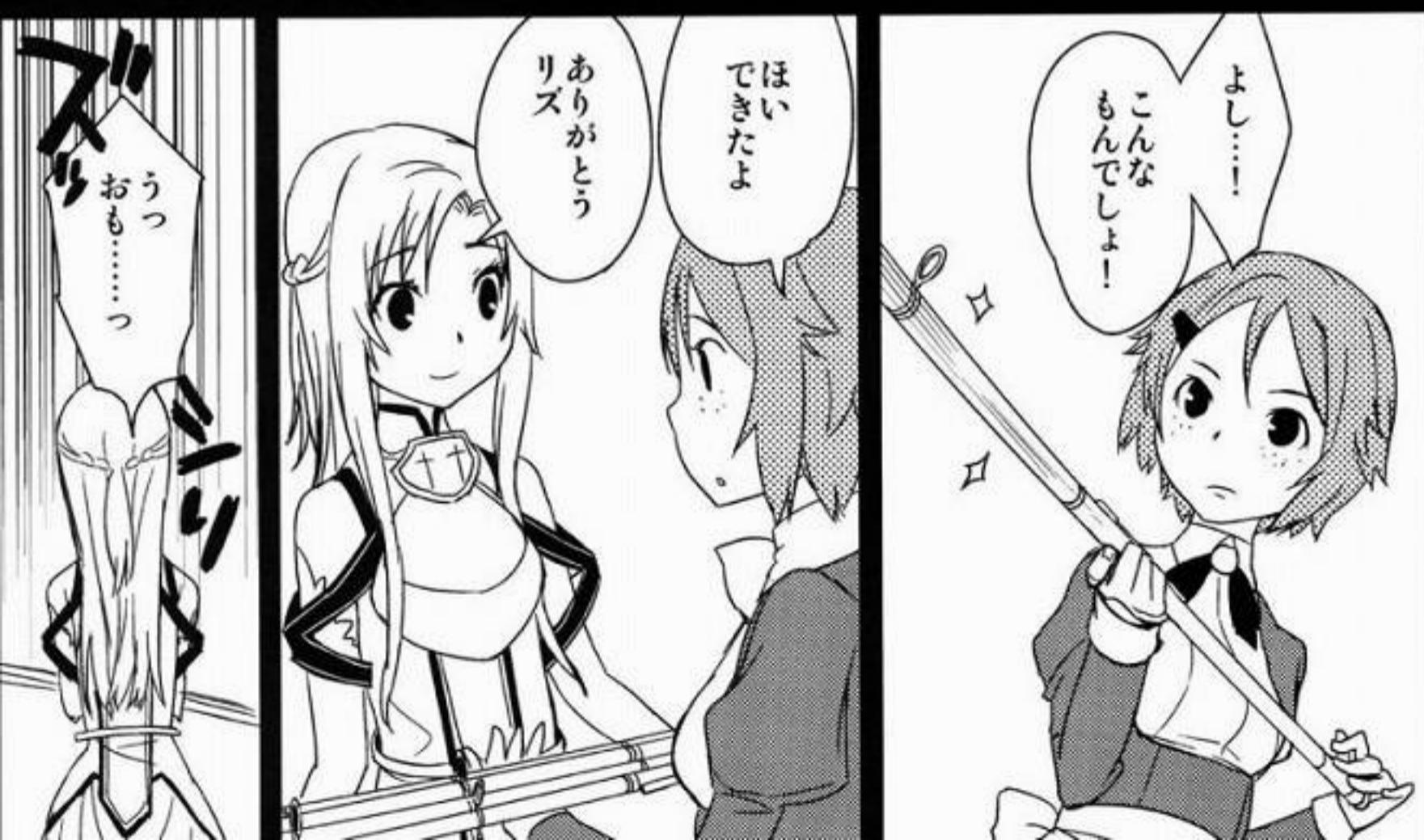
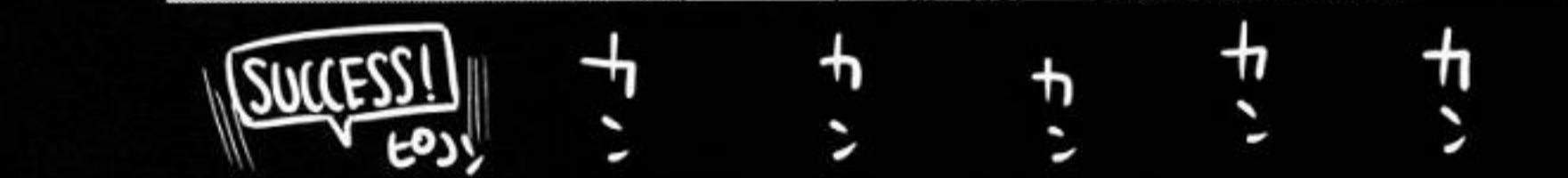


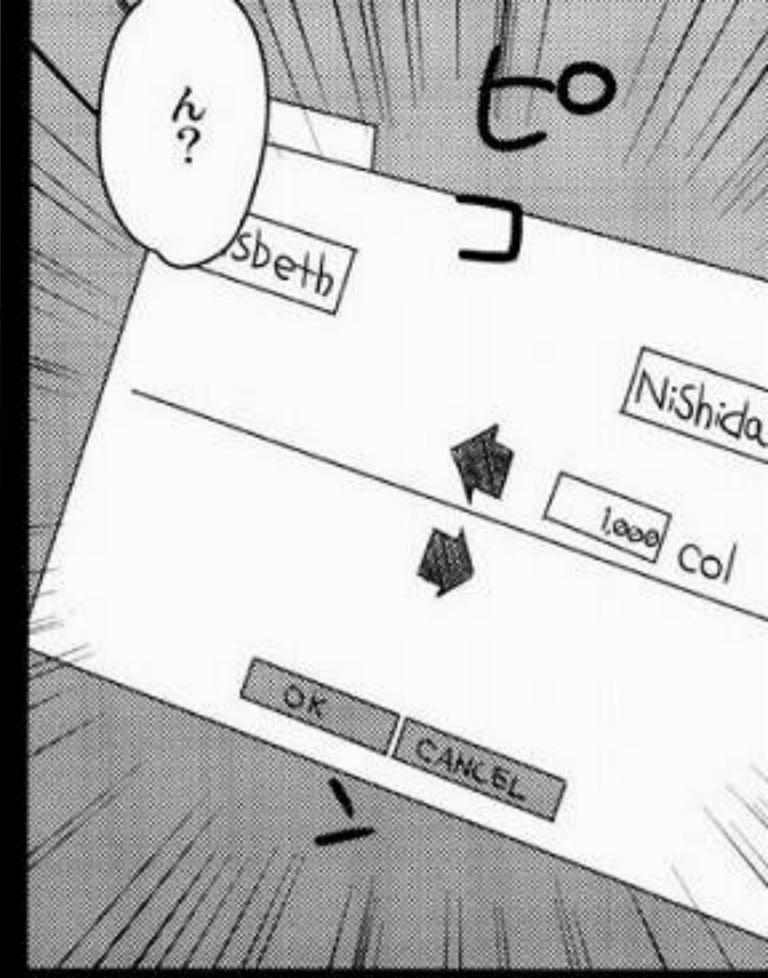
















Postscript

九里史生／川原礫です。

『SAO:リズベット・エディション』をお読み下さってありがとうございます。今回のCOMITIAはついに100回ということで、いつもより本がましい本を作りたかったんですが、スケジュールがいっぱいでもしろペーパーだけになってしまいそう…と思っていたところ、ponz.infoのぽん酢さんが別イベント合わせでSAO本を作られる予定と知り、だいぶ強引に合同本のお願いをしてしまいました。快く(たぶん)承諾して下さったぽん酢さんに感謝の強化ハンマー！ かんかん！ クホホホ…

さて。リズベットというキャラクターは、SAOシリーズのメインキャラで唯一の純生産職で、おそらくフロアアボス戦には一度も参加していないと思われます。

でもそんな彼女でも、ちゃんとゲームクリアに大きな貢献をしているはず！ と思って今回の短編『水音、槌音』を書いてみました。

7月から開始予定のテレビアニメ版SAOでもばっちり登場する予定ですので(というかもう先行PVにワンカット出演してますが)動いたり喋ったりするリズベットも応援して下さると嬉しいです。

それでは、また次の同人誌でお会いしましょう！

リズベットさんを主役にしようと思っていたら、釣竿のはなしになっていた。
SAOだけに。

こんにちは、ponz.infoのぽん酢です。

この度は『ソードアート・オンライン リズベット・エディション』を手に取っていただきありがとうございます。はじめは一人でコソコソと本を作ろうと思っていたのですが、気がつけば原作者である九里さん参戦という「いいのかこれ！？」というビックリ仕様になってしまいます。

MMORPGで生産職といえば人気職のひとつで、生産職のあるゲームでは生産しかしないという人もいるくらいの花形ジョブです。基本的に前線とは縁遠い職になってしまいますが、プレイヤーメイドの武器が敵を倒し、それによって得られる戦利品が市場に出回り相場が生まれていく……そんな、世界の一部を自分が担えるという楽しみが味わえます。

またリズベットのように英雄に剣を託すことも不可能ではありません。ビバ生産職！

舞台がMMORPGという巨大なゲームシステムのため、SAOはまだ語られていない部分が存在します。そこを妄想するのが非常に楽しい作品なので、また機会があれば妄想を形にしていきたいですね！

SWORD ART ONLINE

USBETH EDITION

ソードアート・オンライン リズベット・エディション

ponz.info

X

Word Gear

■ponz.info■

ぽん酢

ponz@ponz.info

■WordGear■

九里史生

mail@gear.sakura.ne.jp

発行日:2012年5月4日

印刷:緑陽社

SWORD ART ONLINE
LISBETH EDITION

